

IIBC NEWSLETTER

Jun 2016
Vol.
129

IIBC 30周年特集号

巻頭メッセージ

IIBC はこれからも、 「人と企業の国際化の推進」に貢献し続けます

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC) 理事長 室伏 貴之

英語は新しい世界と 出会うためのツール

IIBCは、2016年に30周年を迎えました。TOEIC®テストがスタートしたのは、IIBC設立からさらに7年遡ります。その頃の日本はまさにこれから国際化が進展する時期で、私たちの先輩は、日本人が世界に羽ばたくビジネスパーソンになるためには、英語によるコミュニケーション力を育てることが必要と考え、その能力を測るための“モノサシ”としてのテストの開発を米国のテスト開発機関であるETSに働きかけました。そして生まれたのがTOEICテストです。

TOEICテストが多くの皆さまに支持されている理由は、まず、評価にぶれがない点です。常に評価基準を一定に保つために統計処理(イクエイティング)が行われ、能力に変化がない限り、常にスコアも一定に保たれます。これにより、現在の英語能力を正確に把握し、目標とするスコアを設定することが可能となりました。そして

次に、TOEICテストは合否を判定するものではなく、10点から990点までのスコアで評価されることです。このような特長が、企業の海外出張要員の選定や海外赴任の要件、英語研修における進捗状況の把握などのニーズにマッチして多くの企業で利用されるようになり、1980年代後半から急速に普及していきました。

当初、TOEICテストを採用していただいたのは海外進出を進めていた企業が中心

でしたが、その後のグローバル化の進展とともにさまざまな業界や教育界にも活用が広がっています。学習される方にとっては、ご自身の学習の成果がスコアによって見える化できるというメリットがあり、学習の励みとしていただけているのだと思います。

英語ができれば、世界中のいろいろな国の人と会話をしたり、ニュースやインターネットでさまざまな知識を得たり、世

IIBC 30周年特集号 INDEX

- P.1 巻頭メッセージ
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 理事長 室伏 貴之
- P.3 特集「日本の国際化とIIBCの30年」
- P.9 シリーズ ETS【第1回】ETSとは
- P.10 IIBC 30年の歩み
- P.12 Special Interview
明治大学国際総合研究所 特任教授 川口 順子 さん
- P.14 TOEIC® Speaking & Writing 団体特別受験制度の紹介
- P.15 TOEIC® Speaking & Writing 公開テストアンケート結果
- P.16 IIBC 活動レポート — 英語で話す場の提供 —
- P.19 IIBC TOPICS

界の情報や文化に触れることができ、新しい世界に出会えます。それにより、その先の人生がどのように変わっていくのかをイメージすれば、英語の学習はもっと楽しいものになってくると思います。

発信することから コミュニケーションは始まる

今、国も学校における英語教育の改革を進めています。2020年には大学入試改革が行われることになっており、スピーキングとライティングを加えた英語4技能を修得していく方向に進んでいます。

TOEICにも、“英語で話す・書く能力”を測定するテストTOEIC® Speaking & Writing (以下、TOEIC S&W)があります。2007年1月にスタートしており、受験者数は増加してきています。

TOEIC S&Wでは、まず、自分の意図することを明確に伝えることが大切です。例えば、文法の正確さにとらわれて発言を躊躇してしまうよりも、発言した内容が相手に伝わるのが重要となります。グローバル社会で使われている英語はしばしば完全な文章ではないこともあります。コミュニケーションにおいては、完璧な文法で話すことに神経を集中させるより、相手に自分の思いを伝えるためにとにかく発信することが大切です。

また、TOEIC S&Wでは、正解はひとつではありません。人によって答える内容も表現方法も違うので、人の数だけ正解があり、そういう意味でも実際のコミュニケーション場面に即した実践的なテストと言えるでしょう。

TOEIC S&Wを自由に自分の意見を発信するトレーニングの場として、“英語で聞く・読む能力”を測定するTOEICテストと合わせて、4技能の向上にご活用いただければと考えています。

コミュニケーションは 人と人との関わり合い

以前、ニューヨークを訪れた際に、日本企業のグローバル人材育成について触れたところ、「そもそも“グローバル人材”って何ですか」と質問されたことがありました。

陸続きに国がつながっているヨーロッパや多様な人種が集まるアメリカは、さまざま



一般財団法人
国際ビジネスコミュニケーション協会
理事長 室伏 貴之

まな価値観が存在し、お互い認め合って共存する社会となっているので、日本でいう“グローバル人材”という概念があまりないのではないのでしょうか。私たちはグローバル化に対して構えず、難しく考えてしまっているのかもしれない。コミュニケーションは、人と人との関わり合いです。それは家族や友人の間でも、職場でも、使う言葉が異なる海外の人たちとでも同じことです。私たちが毎日の生活の中で日本語をいつのまにか習得していたことを考えれば、英語も、コミュニケーションの中で身に付けていくことができるはず。それは誰にでもできることです。欧米の人々は、そのことを無意識のうちに学んでいるのではないのでしょうか。私たちも、そこから意識を変えていかなければなりません。日本人が肩の力を抜いてコミュニケーションや英語に取り組めるようになった時、大きな変化が訪れるのではないかと思います。

実践の場に身を置くことで コミュニケーション力は育つ

コミュニケーションには言語だけではなく、文化や習慣の違いも大きく影響します。もちろん個人差はありますが、日本人には、大勢の前で間違えたら恥ずかしいと発言を躊躇する人が少なくありません。一方、欧米などでは、発言者が尊重され、どのような意見にも耳を傾ける文化があり、躊躇なく発言します。このような異なる

文化や習慣への適応も、コミュニケーション力です。

発信力、特に話す力をつけるには実践の場(話す場)に身を置くことも大切です。日本人が英語によるコミュニケーション力に磨きをかける上でネックになるのは、日常的に英語を話す人と交流する機会が少ないことです。

IIBCでは、本年2月に開催したTOEIC ENGLISH CAFÉのような英語で話す場を提供するイベントにも力を入れています。実際に英語でコミュニケーションする機会を得ると非常に楽しく、いろいろな国の人の話が聞けてわくわくすることに気づいていただけだと思います。そういう楽しさを知っていただくことも大切だと考えています。

日本人が国際化することで 世界平和に貢献できる

IIBC設立にあたっては、英語を通して日本人が国際化し、進化していくことによって、世界平和と人類の繁栄に貢献できるという思いがありました。

世界にはいろいろな国がありますが、異なるバックグラウンドを持つ人たちとどうしたら円滑にコミュニケーションできるのでしょうか。日本人同士でもわかりあえないこともあります。世界に行くと価値観の違いなど、乗り越えなければならぬ壁はさらに高くなります。そのために、国や地域による文化やバックグラウンドの違いを理解することが重要です。お互いを尊重し、相手の立場に立つてものごとを考えられる能力も必要です。

その意味で私たちは、英語のテストを提供すると共に、英語の先にあるグローバル社会におけるコミュニケーションや人そのものについて考え、それを伝えていくこともミッションだと考えています。

最後になりましたが、この30年間、TOEICテストをはじめ、私どもが提供するさまざまなプログラムをご活用いただきありがとうございます。TOEIC事業を開始し、その必要性を皆さまに認めていただいたことで、このように多くの方々に信頼されるテストとなりました。IIBCは、今後もTOEICプログラムの提供をはじめとするさまざまな活動を通して協会理念である「人と企業の国際化の推進」に貢献してまいります。

特集

日本の国際化と IIBCの30年

戦後、英語教育が再開し、今日につながる日本の国際化がスタートしました。その後、経済成長とともに、海外渡航自由化や経済の国際化など、否応なくグローバル化の波が押し寄せ、時代とともに日本人の英語に対する考え方は変化していきます。そして1979年、英語のコミュニケーション能力を測るモノサシとしてTOEIC®テストがスタート。そのころから、英語は受験科目や教養としての学問からコミュニケーションツールとしての役割がクローズアップされていきました。

今年は、TOEICプログラムの実施・運営を手掛ける一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)が設立30周年を迎える節目の年です。この機会に、日本の英語教育とグローバルコミュニケーションの流れを、IIBCの活動とともにたどってみました。

～ 1979年

日本のグローバル化と英語

― 戦後復興と経済発展、そして貿易摩擦へ

第二次世界大戦中、英語は敵性語として使用が禁止されていましたが、戦後、ラジオからは進駐軍放送WVTR(後のAFN)で英語が流れ始めました。米国の文化や進駐軍とのビジネスなど、新しい時代の英語の実用的な価値を多くの人々が認識した時代です。

その後、復興は急ピッチで進み、日本は急速に経済成長しました。1955年からの神武景気と1958年からの岩戸景気を経て高度成長期に突入します。そして1964年には、東京オリンピックが開催され、戦後の復興を世界にアピールしました。同じ年に観光目的の海外旅行が自由化され、翌年、日本で初めての海外パッケージツアーが発売されました。当初、国民の憧れだった海外旅行は、時代とともに渡航費用が安くなり、海外渡航者数は増加し、1972年には100万人を突破しました。

大学への進学率も高まり、1965年には大学生数が100万人を突破します。受験戦争が激化する中で、高校や予備校では、英語は大学入試の中でも重要な科目として、長文読解や英文法、英単語の暗記を中心としたいわゆる受験英語に力が入られるようになりました。

一方、ビジネス社会においては、コミュニケーションとしての英語の必要性が高まっています。



戦後、進駐軍が入ってくると、駅や道路の標識がローマ字で整備されました

1967年、日本はGNPにおいて世界第2位となるまでに経済が
発展します。その発展の牽引役となっていたのが鉄鋼や石油化学、
機械など重厚長大の輸出メーカーでした。1973年に円が変動相
場制に移行し、その後円高が進みましたが、製品の輸出は増え続
け、貿易摩擦が大きな国際問題となっていきます。

一 英語によるコミュニケーション能力を測る モノサシとしてTOEICテストを開発

1970年代後半になると、産業界でも海外部門要員を育成しよう
という機運が高まり、大手電気機器メーカーを中心に独自の英語
研修システムを整備する企業も出てきました。ところが当時、知
識・教養としての英語力を測定するテストはありましたが、実際の
コミュニケーションに必要な英語能力を評価するテストは見当た
りませんでした。また、どのような目標に向かって英語学習をすれ
ばよいかという基準もありませんでした。そこで、英語によるコミュ
ニケーション能力を客観的に評価し、合わせてその評価を目標設
定に活用しやすいスコアで表示するモノサシを作ろうと、TOEICテ
ストの開発に向けてプロジェクトが立ち上がりました。プロジェクト
が目指したのは英語によるコミュニケーション能力の向上を支援し、
人と企業の国際化に貢献することでした。

プロジェクトの中心となったのは、後に当協会の会長となる渡辺
弥栄司と副会長となる北岡靖男です。彼らは、日本企業の海外進
出について、次のように考えていました。

「海外の人たちとコミュニケーションを図ることなく、単にモノを

売ったりお金を投資するだけでは、いずれ日本企業は立ちいか
なくなる。心の通ったコミュニケーションを通じて、お互いに信頼し
思いやる人間関係を築いていかなければならない。そのためには、
知識としての英語ではなく、実際にコミュニケーションをとるため
のスキルとしての英語能力を身につける必要がある。それも、海
外部門など特定の人だけでなく、多くの日本人が英語コミュニケー
ションのスキルを磨かなければならない時代がやってくる」

実際の開発は、TOEFLやアメリカの大学入学適性試験(SAT)など
を手掛け、テスト開発に豊富なノウハウを持つ世界最大のテスト開
発機関であるETS (Educational Testing Service) に依頼しまし
た。テストの構想は、アカデミックな英語能力を問うものではなく、
同時にビジネスの専門用語を知らなければできないものでもない、
「世界共通語としての英語によるコミュニケーション能力を測定する
テスト」というものでした。ETSもこの構想に賛同して、何回かの折
衝を重ねながらテスト開発が進んでいきました。

国内では、TOEICテストを実施するための準備が進みました。通
商産業省(現経済産業省)の賛同を得て、1979年、財団法人世界経
済情報サービス(WEIS)内に「TOEIC運営委員会」が設置されまし
た。その年の12月、第1回公開テストが札幌、東京、名古屋、大阪、
福岡で実施され、受験者は男性1,929名、女性844名の計2,773名
で、このうち企業・団体のビジネスパーソンが1,848名と約7割を占
めました。

1980年～1999年

英語による実践的な コミュニケーションのための取り組み

一 1981年、TOEIC IPテストがスタート

TOEICテストは期日と会場が指定された公開テストとしてスター
トしましたが、企業の都合で実施できる受験システムが求められて
いました。これらの声に応えて、1981年、企業・団体・学校単位で、
試験日と会場を任意に設定できる団体特別受験制度
(Institutional Program 以下、IPテスト)がスタートしました。IP
テストは、電機や自動車業界を中心に、精密機械や化学などの製
造業、建設業界において、海外要員の選抜だけではなく、社内検
定制度や海外留学制度へと活用されるようになりました。

1970年代の第一次石油危機以降、米国では小型の乗用車の需
要が拡大し、日本車の対米輸出が増加しました。1980年には、日
本は米国を抜いて世界一の自動車生産国になりました。このこと
が新たな貿易摩擦の火種となり、1981年には対米輸出の自主規
制が始まりました。そして、日本の自動車メーカーは、米国での現
地生産を本格化させます。IPテストが始まったのは、まさにそのよ
うな時代だったのです。



国際コミュニケーション英語能力テスト

ETS 認定 TOEIC
Test of English for International Communication

第1回

- 試験日 1979年12月2日(日)
- 試験会場 札幌/東京/名古屋/大阪/福岡
- 受験料 5,500円

申込受付中 締切: 10月31日

受験案内・申込書は主要書店にもあります

財団法人 世界経済情報サービス
TOEIC運営委員会
〒100 東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビル

(03)581-5663-5

ETS EDUCATIONAL TESTING SERVICE
Princeton, New Jersey, USA

ETSは、SAT(全米大学入学共通試験)、GRE(大学院入学共通試験)、GMAT(経営大学院入学試験)、LSAT(法律大学院入学試験)などの入学試験の他、各種国家試験、資格試験を開発・実施しているアメリカの公共機構

後援
経済団体連合会 経済同友会 日本青年会議所 日本貿易振興会 日本貿易会
貿易研修センター 日本在外企業協会 朝日新聞社 朝日イブニングニュース社

記念すべき第1回公開テストのポスター

— 1986年、TOEIC事業の規模拡大に合わせてIIBCが発足

1985年9月には、ニューヨークのプラザホテルで開催された先進5カ国蔵相・中央銀行総裁会議で、ドル高是正のために協調介入を実施するという共同声明が発表されました。いわゆる「プラザ合意」で、その後、円高が急速に進んで日本企業の海外投資は加速します。

1986年には日銀の超金融緩和策などにより、バブル経済に突入しました。海外旅行がブームとなって、同年、海外旅行者は500万人を超え、1990年には1,099万7,000人と1,000万人の大会を突破しました。

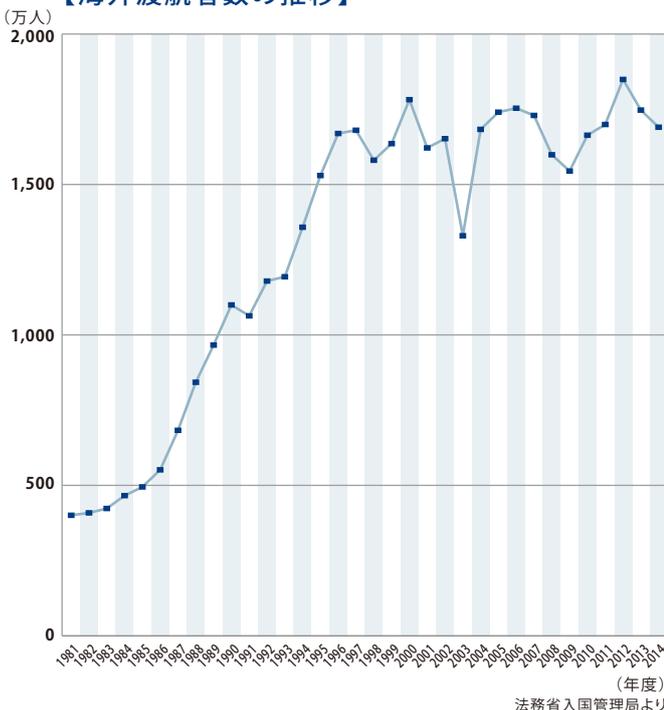
1970年代に設立され始めた英会話学校が一気に教室数を増やすのも1980年代です。円高の進行とともにネイティブの講師が増えていきました。それまでの英会話学校は一人の講師が10～20人の生徒を指導する学校形式が主流でしたが、1980年代後半には少人数の生徒が教師と会話をしながら勉強するサロン形式の教室も増えていきます。

1980年代には企業の国際化を進める中で、研修の一環としてIPテストを実施する企業が増加しています。その中で、新入社員の入社時の英語力をチェックするために受験させる企業も急増し、配属のための参考や英語研修のクラス分けなどに利用されるようになりました。

また、1980年代は、金融業界においても自由化と国際化が進み、英語を必要とする業務が急速に増えていきました。国際部門だけでなく、幅広く国際要員の育成を行う企業も増え、都銀や地銀のほか、保険や証券会社のTOEICテストの活用が増えていきました。

TOEICテストの受験者数は、1979年以来30%以上の増加率で推移し、1986年度にはその数が10万人を突破しました。このような規模の拡大に合わせて、TOEICテストの運営・実施をより円滑にし、TOEIC事業の運営基盤を確立するために、1986年2月、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)が発足しました。

【海外渡航者数の推移】



日本の国際化と世界平和への貢献を目指し、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が発足

1979年に第1回TOEIC公開テストがスタートしてから、1986年1月までに19回に及ぶ公開テストが実施されました。IPテストの利用企業も増加して、その年までに400社、受験者数も累計で20万人に達しています。こうしたTOEIC活用企業、受験者数の増加を受けて、TOEIC事業を核として、グローバルコミュニケーションに関する研究や能力検定を推進していくために、財団法人世界経済情報サービス内の「TOEIC運営委員会」を発展的に解消して、独立した法人格を取得すべきという声が高まっていきました。

財団設立の準備委員会代表を務めた初代会長の渡辺弥栄司は次のように述べています。

「現在は、一国だけではなく、地球全体で取り組まなければ解決できない問題がたくさん出てきています。新しい財団の趣旨は、日本の国際化を大きく推進しようという点にありますが、それがひいては、世界の平和、人類の平和と繁栄に役立つことであると私は考えています」

また、初代副会長となった北岡靖男は、「TOEIC事業はその公共性から、当初から公益法人で運営されるべきと考えていました。ここ2～3年、利用者が増えて、その価値が広く認められるに至り、独立した財団法人としてIIBCを設立しました」と述べています。

設立準備委員会には、石油連盟や電気事業連合会などの主要経済団体やマスコミや商社、繊維メーカーなどの企業が名を連ねました。

IIBCの設立趣意書には「国際ビジネスコミュニケーション能力の開発及び向上を図り、もって国際的な経済活動の円滑化と経済交流の促進に寄与することを目的とする」と記されています。IIBCの設立により、国際ビジネスコミュニケーション能力の向上を測るためのモノサシとしてのTOEIC事業の役割がより明確化し、TOEICテストの活用がさらに広がっていきます。



「財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 発足」を伝える TOEIC Newsletter 18 February, 1986

— 大学生にも浸透するTOEICテスト

その後TOEICテストを採用する企業はますます増加し、受験者数も加速度的に増えていきました。85年度に8万8,000人だった受験者は90年度には33万2,000人と約4倍の伸びとなり、累計受験者数が100万人を突破しました。この年の11月には、「グローバル時代におけるコミュニケーション～世界共通語としての英語～」をテーマに、TOEIC 10周年記念国際シンポジウムが開催され、評論家の竹村健一氏が講演を行いました。



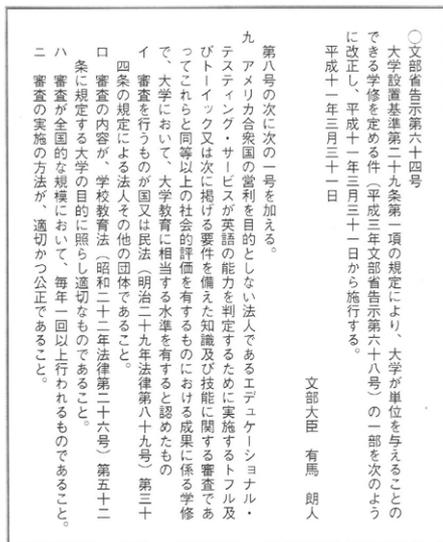
1990年にTOEIC 10周年記念国際シンポジウムを開催

1991年、バブル経済が崩壊しましたが、TOEICテストの受験者数が大きく落ち込むことはありませんでした。1992年度から1994年度までは横ばいとなるものの、1995年度からは再び増加に転じます。

この背景には、ITの進化によるコミュニケーションの変化があります。Eメールによる英語での海外とのやりとりやWEBサイトでの情報提供により、企業活動のグローバル化が加速し、英語でのコミュニケーション機会がさらに増えていきました。多くの企業がTOEICテストで目標スコアを設定し、社員の英語習得の進捗にTOEICテストを活用し、そのスコアを人事データベースにインプットして管理するようになりました。

もうひとつ、増加の要因として、大学にTOEICテストが浸透していったことがあります。TOEICテストの受験者に占める大学生の割合は、当初は全体の10%程度でしたが、1980年代後半からIPテストを導入する大学が増え、TOEICテストを受験する学生が増加、1992年には30%に達しました。

そしてバブル崩壊で、“就職氷河期”に突入し、大卒の就職率はバブル末期の1991年度の81.3%をピークに急落しました。その頃、



1999年、文部省がTOEICテストを大学の単位認定の要件に指定

TOEICスコアを採用の参考にする企業が増え始め、厳しい就職戦線を勝ち抜くために、自己アピールの材料としてTOEICスコアを企業に提示する学生が増え、TOEIC受験を推奨する大学も多くなりました。

大学でも国際化に対する意識が高まり、外国人教師の招へいや英会話授業の開設、単位認定留学制度の導入など、コミュニケーション能力養成を目指したカリキュラムの整備が活発化していきます。

コミュニケーション能力重視の英語教育の流れは、高校にも及んでいきました。1994年から、聞く・話すなど「使える英語」を目指して高校の英語科目にオーラル・コミュニケーションが導入され、高校でも外国人教師の採用が増えていきます。独自の英語学習カリキュラムを導入し、そのモノサシとしてTOEICテストを取り入れる高校も増えていきました。

1999年に文部省(現文部科学省)から単位認定の要件としてTOEICテストが正式に認められたことによって、単位認定や入試などでの活用も拡大しました。

— 「1998年 長野オリンピック」のボランティアにTOEICテストを実施

1991年6月のIOC総会で1998年の第18回オリンピック冬季競技大会の長野開催が決定しました。同大会は、運営業務の多くにボランティアを活用する日本発の“参加型オリンピック”として注目されました。これまでにない市民レベルでの国際交流の広がりが期待されるなかで、ボランティアの英語力の習得とレベルチェックにTOEICテストが重要な役割を果たしました。

NAOC(長野オリンピック冬季競技大会組織委員会事務局)では、まず、ボランティアにTOEICテストを受験してもらい、英語能力のレベルを把握して人員配置の参考にしました。特に英語が必要な業務を希望するボランティアについては、730点以上を「通訳レベル」、470点以上を「一般語学レベル」として、海外選手や大会委員、報道関係などの接遇業務に割り振られました。



1995年、長野オリンピックのボランティアのテスト会場

2000年代

「人と企業の国際化」の 新たなステージへ

— 2001年、TOEIC Bridgeがスタート

2000年代は、さまざまなニーズを受けて、TOEICプログラムに新しいテストが加わりました。

1990年代後半から、不況による地価下落や景気打開のための規制緩和により、外資系企業によるM&Aや資本提携が活発化します。世界経済のグローバル化も進み、日本の企業を取り巻く環境が変化していきます。

2000年、小淵元首相の私的諮問機関である「21世紀日本の構想」懇談会が「グローバル・リテラシー（国際対話能力）を確立する」ために、長期的な課題として英語を第2公用語とすることを提言したことで、日本中で英語学習熱が高まりました。

TOEICテストが企業、団体に幅広く浸透していることを受け、大学・高校などの教育機関からは、TOEICテストよりも「易しくて」「日常的で身近な」「時間の短い」初・中級学習者向けのテストを求める声が高まりました。このニーズを受けて、スコア表示による評価方法、信頼性の高いモノサシ機能など、TOEICテストの特長はそのままに、初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせたTOEIC Bridgeが開発され、2001年11月、TOEIC Bridgeの第1回公開テストが実施されました。TOEIC BridgeにはTOEICテストへの架け橋という意味を込めています。

2002年7月文部科学省は「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」という名の英語教育改革案を発表しました。その中に、中学・高校で実践的コミュニケーション能力を重視した英語教育への改善が盛り込まれました。英語教員については、備えておくべき英語力の目標として英検1級、TOEFL550点、TOEICテスト730点程度という目標が示されました。その結果、英語教員採用時のTOEICテスト活用も増えました。



2001年に開催されたTOEIC Bridgeの第1回公開テスト

— 2006年、TOEICテストのリニューアルに続き、 2007年にTOEIC Speaking & Writing (以下、TOEIC S&W)がスタート

1979年にTOEICテストがスタートしてから四半世紀が経過し、時代とともに求められるコミュニケーション英語能力は日々変化してきました。この状況に対応して、TOEICテストは、「More Authentic（より実地的な）」というコンセプトの下、2006年5月実施の第122回公開テストからリニューアルされました。

新TOEICテストでは、問題文の長文化、発音のバラエティの増加[米国・英国・カナダ・オーストラリア(ニュージーランドを含む)]、誤文訂正問題を削除して長文穴埋め問題を追加するなど、より現実のコミュニケーションに近いテスト内容へと変更が行われました。テスト結果は、従来のリスニング、リーディング、トータルスコアに、Score Descriptors(レベル別評価)とABILITIES MEASURED(項目別正答率)が新たに加わり、より充実したフィードバックの提供が可能となりました。

また、グローバル化の進展にともない英語での発信力の重要性が要求されるようになり、スピーキングとライティングという能動的な能力を直接測定する必要性が高まってきました。こうしたニーズを受け、英語でコミュニケーションを図るために必要な「話す」「書く」能力を測定するテスト、TOEIC S&WがETSによって開発されました。TOEIC S&Wは、一般的な職場環境で行われるさまざまなコミュニケーション場面を取り入れ、実際の場面で必要な英語のスピーキングとライティングの能力を正確かつ効率的に評価することができます。第1回が2007年にスタートし、2011年度には年間受験者が1万人を超えています。



「TOEICテスト」ニューバージョンの発表会（2005年）



TOEIC S&Wの発表会（2006年）

2010年～

「グローバルに活躍できる人材」育成へ

— IIBCのグローバル人材育成プログラムが本格化

かつてはグローバル市場をリードする力強さをを見せていた日本企業ですが、2000年以降、その存在感が弱まりつつありました。しかし、国内市場の縮小にともない、業種や企業規模を問わず、グローバル市場に対応せざるを得ない状況となっ ていきます。企業では、営業関連部門だけではなく、研究開発、生産、人事と部門を問わず、グローバル市場において、組織および市場を牽引し、活躍できるグローバル人材の育成が課題となっ ていきます。

そのような社会環境の変化のなかで、IIBCは、TOEIC事業だけではなく、英語力に加えてグローバル人材に求められる要件を探り、その育成を支援するGHRD (Global Human Resources Development) 事業にも活動を広げています。

2011年3月には、学生やビジネスパーソン、教育機関関係者、企業の人材育成担当者を対象にした「第1回グローバル人材育成フォーラム」を開催しました。「世界で活躍できる人材をいかに育てるか」をテーマに、竹中平蔵氏をはじめとする産官学の代表をスピーカーに招き、「グローバル人材」の要件と育成法を探りました。

翌2012年11月、インタラクティブセッションを通じて、グローバル人材育成に関する諸問題・課題について考える、「第1回地球人財創出会議」を開催。企業の人事リーダー、起業家、コンサル



2011年に開催された「第1回グローバル人材育成フォーラム」



2012年には「第1回地球人財創出会議」を開催

タント、教育者など各分野の第一人者をゲストスピーカーとして招き、参加者もディスカッションに加わって建設的な意見交換を行いました。その後も「地球人財創出会議」は隔月で行われ、その内容をグローバル人材育成プロジェクトサイトやFacebookページを通じて発信しています。

— グローバル化の新たなステージで期待されるIIBCの役割

近年、グローバル化は日本国内企業にも広がっています。英語を社内公用語化し、資料や多国籍の社員が参加する会議で英語の使用を義務づけるなど、英語の実用化がさらに進んでいます。

2013年にIIBCが行った「上場企業における英語活用実態調査」では、75.0%の企業が業務で英語を使用している（「英語を使用する部署・部門がある」「特定部署・部門はないが英語使用はある」の合計）と答えています。

2015年は、訪日外国人観光客数が前年比47%増の1974万人と、過去最高を記録しました。2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控えて、英語の必要性に対する意識が高まっています。英語はこれまでは海外旅行や海外赴任など、海外に行く人だけが必要だと思われていましたが、日本で外国人をおもてなしするためにも英語は必要で、英語コミュニケーションの新たな時代を迎えているといえるでしょう。

そのような機運のなか、2014年度より、国土交通省観光庁主管の国家試験である通訳案内士試験の英語筆記試験の免除対象として、TOEICスコア840点以上、TOEICスピーキングスコア150点以上、TOEICライティングスコア160点以上が認定されました。

TOEICテストは2006年のリニューアルから10年が経過し、その間、インターネットの普及により、Eメールやチャットなどの新しいコミュニケーション方法が普及してきました。それらの変化に対応するためにアップデートを行い、2016年5月29日実施の第210回公開テストから、出題形式が一部変更されました。

IIBCは、設立してから30年、「人と企業の国際化」を基本理念に、TOEIC事業を核として歩んでまいりました。グローバル化がますます進む中、発足以来のノウハウと経験を活かし、英語によるコミュニケーション能力の向上とグローバル人材の育成に貢献してまいります。



2015年11月に開催されたTOEIC Test Updates 発表会

TOEIC®プログラムの開発を手掛ける 世界最大のテスト開発機関ETS

このコーナーでは、Educational Testing Service (ETS) についてその組織と活動、テスト開発プロセスなどをシリーズとしてお伝えしてまいります。今回は、ETSより組織の概要を紹介します。

ETS：世界最大の非営利テスト開発機関

ETSはプリンストンの本部に加えて米国内数カ所の地域事務局および世界各地の支部を通じて活動を展開しています。1947年、大学入学試験協会、米国教育協議会、カーネギー教育振興財団という3つのテスト開発団体が親団体となり、ETSを設立しました。それ以降70年近くにわたり規模を拡大し続け、今では全世界の学習者にサービスを提供するまでに成長しました。ニューヨークの南西80キロのニュージャージー州プリンストンに本部を置くETSは、カリフォルニア州、テキサス州、ワシントンDCを含む他の8都市に事務局を設置しています。

設立以来、世界の先頭に立ち、TOEICテスト、TOEFLテスト、GREテストなどの各種試験を開発し、世界的に教育の質と公平性の向上に貢献するというミッションを果たしてまいりました。毎年、世界180カ国、9,000カ所以上で実施される、合計5,000万回以上のテストの作成・運営・採点を行っています。そして、ミッションに基づき活動する非営利団体として、世界の人々に対する教育の質と公平・公正性のさらなる向上を目指して、厳密な調査と研究に基づきテストを開発しています。

ETSは人は学ぶことを通じて、自分の可能性を広げ、世界に素晴らしい貢献ができるという信念を抱く教育の専門家、研究者、評価試験開発者から成るチームです。

教育政策のスペシャリストに加え、調査、テスト開発、心理学、統計分析、言語学、グローバルアセスメントの専門家を含む3,300人以上を雇用しています。

こうした広範な知識を最大限に活用し、約200種類もの広範な評価試験プログラムを開発してきました。なかでも最も知名度が高いのはTOEICテスト/TOEFLテスト、米国内の大学・大学院入学に活用されている各種の学力評価試験、大学院進学のためのGREテストです。その他にも、私立中学校入学試験、小中学校卒業認定試験から、外交官資格試験まで、広範囲な試験があります。加えて、教育研究・分析を実施の上、教員資格試験、英語研究、小中高校教育・高等教育に関連する多様なカスタマイズ製品・サービスを開発しています。

信頼性・妥当性・公平性

ETSは、教育の現場や職場コミュニティにおいて十分な情報に基づく決定を下すお手伝いをするために、業界最先端の知見、厳密な調査、そして品質への妥協のないこだわりをもって評価試験を設計します。

ETSが提供実施するサービスは、教育と学習の改善はもとより、学習者・コミュニティにとっての機会拡大、教育および政策立案者への情報提供、教育測定分野の進歩を目的として設計されています。

ETSは、テストが人の人生を変えるかもしれない機会であることを理解しているため、自分たちの仕事を非常に真剣にとらえています。テスト開発の指針としているのは、公正で妥当な評価試験を提供することにより、教育の質と公平性を向上させるというミッションです。このミッションを達成するために、ETSは開発プロセスの中で以下の3点を重視します。

信頼性：テストは一貫した評価基準に基づくよう設計されます。同じ人が特定のテストを何度受けても、その人の実力が変わらない限り、結果は常に同じになります。この信頼性は繰り返し検証されます。

妥当性：そのテストが対象とする特定のスキルを測定する上で、設問の形式と内容が妥当であること、実際にそのテストによってそれらのスキルが正確に測定されていることを確認するため、細心の注意をはらいます。

公平性：受験者によって有利・不利が生じるような言葉遣いや設問内容避け、全受験者が公正に評価されるよう注意します。

※詳しくは ets.org/u/dyj をご覧ください。

この質と公正性に対する姿勢に基づき、TOEICテストをはじめとするすべてのETSのテストプログラムでは、特定の国・地域特有の表現や文化的背景を理解している受験者だけが解答できるような設問は排除されています。こうした姿勢が貫かれているからこそ、TOEICプログラムは、世界共通言語としての英語の能力を評価するための公正な手段として採用されているのです。まさにこの試験方法に対する信頼性が、ETSのテストが全世界で受け入れられている最大の理由です。

学習、最高の品質基準の維持、公平・公正性に対する姿勢は、今後も決して揺らぐことはありません。これらを追及しつつ、市場のニーズの変化を予測し、教育分野におけるパートナーや、さまざまな分野で学んでいる学習者に対して意味のある情報を提供するように取り組んでいます。ETSでは、各界のパートナーと協力することにより、世界中の学習者がその能力を最大限発揮できるようお手伝いができると考えています。そうした学びを重ねた人々が、この世界を変えることができるのだと信じています。

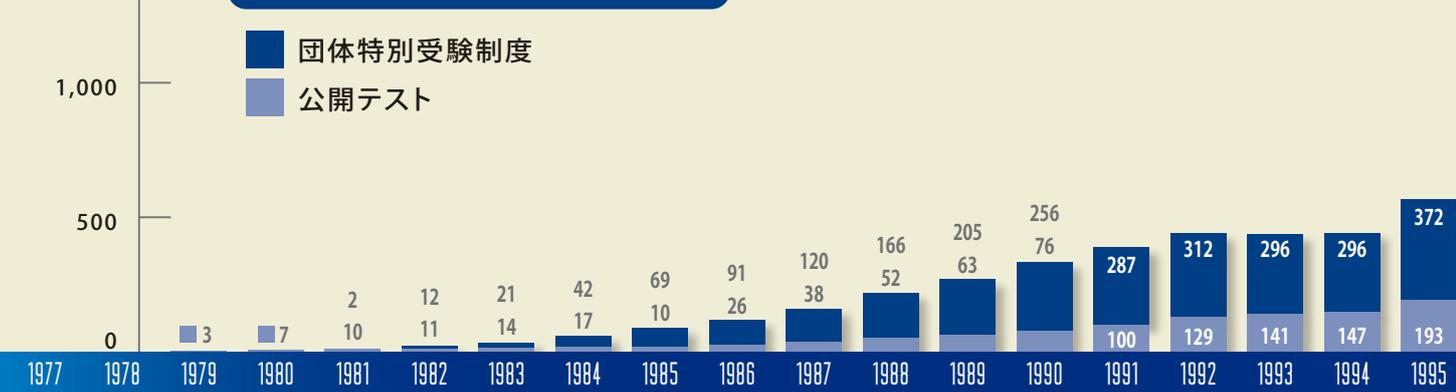


IIBC 30年の歩み

TOEIC® S&W 受験者数の推移



TOEIC® テスト 受験者数の推移



【IIBCの歩み】

1977 米国のETSがTOEICテストの開発を依頼。

1978

1979 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）設立。TOEICテスト年間受験者数10万人達成。公開テスト会場に静岡が加わる。

1980 6月 TOEIC LPI (Language Proficiency Interview) 開始。TOEIC Newsletter 創刊。

1981 財団法人世界経済情報サービス（WEIS）内に、TOEIC運営委員会を設置。12月 第1回TOEIC公開テストを札幌・東京・名古屋・大阪・福岡で実施。

1982 TOEICテストの実施・運営は、財団法人世界経済情報サービス（WEIS）を母体とすることが決定。

1983 公開テスト会場に京都、広島が加わる。

1984 公開テスト会場に川崎、神戸が加わる。

1985 TOEICテスト受験者数が累計で20万人を超える。テストの受験者数が年間で5万人達成。

1986 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）設立。TOEICテスト年間受験者数10万人達成。公開テスト会場に静岡が加わる。

1987 TOEIC LPIテスト年間受験者数10万人達成。

1988 TOEICテスト年間受験者数20万人達成。累計で50万人を超える。

1989 TOEICテスト受験者数が累計で100万人を超える。TOEIC10周年記念国際シンポジウムを開催。公開テスト会場に岡山、高知、鹿児島、那覇が加わる。

1990 公開テスト会場に金沢、松山が加わる。テスト利用の企業・団体の数が500を超える。

1991 TOEIC公開テスト年間受験者数10万人達成。

1992 公開テストが年4回体制となり、会場に千葉、埼玉、新潟、浜松、四日市、北九州、熊本が加わる。

1993 公開テスト会場に松江が加わる。

1994 公開テスト会場に福島、長野、奈良が加わる。

1995 長野オリンピック（1998年開催）の語学ボランティアにTOEICテスト採用。TOEICテスト年間受験者数50万人達成。

【日本経済の歩み】

世界貿易機関（WTO）が発足。円相場が1ドル＝79円75銭の史上最高値を記録。阪神・淡路大震災が発生。

関西国際空港が開港。

欧州連合（EC）が発足。

就職氷河期に突入。

牛肉とオレンジの輸入自由化を開始。

バブル経済が崩壊。海外旅行者数が年間1000万人を突破。

3%の消費税を導入。東証株価3万8915円87銭の史上最高値を記録。

東証株価3万円を突破。

東証株価2万円を突破。ニューヨーク株式市場が大暴落（ブラックマンデー）。

バブル経済に突入。男女雇用機会均等法が施行。

プラザ合意で円高。

東証株価1万円の大台に。

東京アイズニールランド開園。

アメリカで日本企業が初の乗用車生産を開始。

自動車対米輸出自主規制が行われる。

日本の自動車生産台数が1000万台を突破。

第二次石油危機。ソニーがヘッドホンステレオ「ウォークマン」を発売。

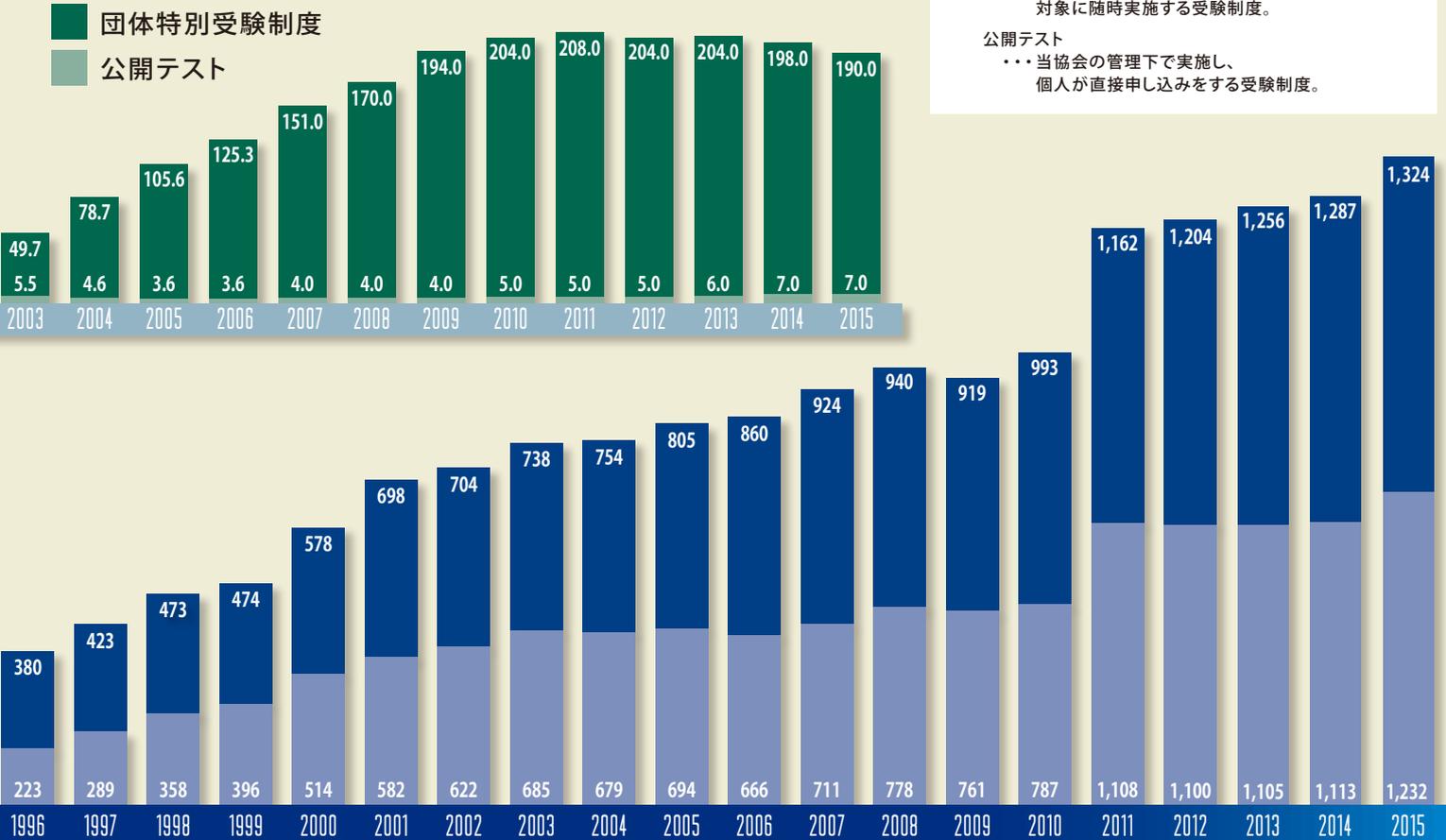
新東京国際空港（成田国際空港）が開港。

日米カラーテレビ（COMAK）市場秩序維持協定が締結される。

IIBCは、1979年に第1回のTOEIC®テストが実施されてから7年後の1986年に発足しました。
以来、30年間、TOEICテストを中心として、日本人の国際コミュニケーション力の向上を目指して活動しています。

TOEIC Bridge® 受験者数の推移

(注) 団体特別受験制度 (IP: Institutional Program)
 ... 企業・大学などの団体が、所属社員・学生などを対象に随時実施する受験制度。
 公開テスト
 ... 当協会の管理下で実施し、個人が直接申し込みをする受験制度。



公開テストが年5回体制となり、会場に高崎、松本、和歌山が加わる。
 公開テストが年6回体制となり、会場に盛岡、宇都宮、甲府、岐阜、滋賀、長崎が加わる。
 TOEICテスト累計受験者数500万人達成。公開テスト会場に日立、下関、宮崎が加わる。
 TOEIC 20周年記念シンポジウム開催。公開テスト会場に豊橋、高山、佐賀、大分が加わる。
 TOEICテスト受験者数、年間100万人を達成。公開テストが年7回体制となり、会場に富山、上田、函館、帯広、郡山が加わる。
 11月 TOEIC Bridge 公開テスト・団体特別受験制度 (IPテスト) 開始。TOEIC 公開テスト会場に、福井、津山、佐佐保、岡崎、徳島、苫小牧、青森、水戸、沼津、鳥取、旭川、八戸、福山、山口、秋田が加わる。
 TOEICテスト累計受験者数1,000万人を達成。公開テスト会場に庄内、津、前橋、都留、小山が加わる。
 公開テストが年8回体制となる。
 公開テスト会場に釧路、長岡、北見、山形、いわき、足利が加わる。
 TOEIC Bridge 年間受験者数10万人を達成。公開テスト会場に伊勢が加わる。
 5月 第122回公開テストよりTOEICテストリニューアル。公開テスト会場に弘前が加わる。
 1月 TOEIC S&W 公開テスト開始。TOEIC 公開テスト会場に岩国が加わる。
 TOEIC S&W 団体特別受験制度 (IPテスト) 開始。
 TOEICテスト30周年。第1回 IIBC エッセイコンテスト開催。
 3月 TOEIC IP 終了。TOEIC Bridge 年間受験者数20万人達成。
 TOEIC 公開テストが年9回体制となる。TOEICテスト年間受験者数230万人達成。IIBCが一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会に移行。第1回地球人財創出会議開催。
 TOEIC S&W 年間受験者数1万人達成。第1回グローバル人材育成フォーラム開催。
 TOEIC 公開テストが年10回体制となる。TOEICプログラム年間受験者数258万人達成。
 TOEICプログラム年間受験者数262万人達成。
 5月 TOEICテストが200回を迎え、累計受験者数3,000万人を達成。

デジタル多チャンネル放送が開始。
 消費税が3%から5%に引き上げられる。
 長野オリンピック開催。日本版金融ビッグバンがスタート。
 日本銀行がゼロ金利政策を決定。
 大阪証券取引所にナスダック・ジャパンが開設される。
 インターネット博覧会を開催。米同時多発テロ事件が発生。
 経済団体連合会と日本経営者団体連盟が統合して日本経済団体連合会が発足。
 地上デジタル放送が東京、名古屋、大阪で開始される。
 派遣業務が製造業に解禁。
 愛・地球博(2005年国際博覧会)が開幕。海外在留邦人が戦後初めて100万人を突破。
 リーマンブラザーズが経営破綻し、金融危機が世界に拡大。
 日本郵政公社が民営化。
 米大統領にバラク・オバマ氏が就任。
 日本航空会社更生法適用、事業会社で過去最大の破綻。中国のGDPが日本を抜き世界第2位に。
 東日本大震災と福島原発事故が発生。
 東京スカイツリー開業。iPS細胞の山中医学博士がノーベル賞受賞。
 富士山が世界遺産登録。
 消費税5%から8%に引き上げられる。ノーベル物理学賞にFND開発者3氏受賞。
 マインバー制度がスタート。

英語は世界への扉を開く道具。 「外国」という意識の壁を越え、 真の国際人を目指してください。

明治大学国際総合研究所 特任教授 川口 順子 さん

これまで環境大臣や外務大臣、参議院議員を歴任された川口順子さんは、通商産業省国際企業課長在任時に財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会発足や、TOEIC®テストに深い関わりを持たれています。長い間、日本の国際ビジネスの現場を見つめてきた川口さんに日本のグローバル化と英語の重要性についてお話を伺いました。

大切なのは わかりやすく伝えること

— TOEICテストが始まった当時、日本のグローバル化はどのような状況だったのでしょうか。

日本のグローバル化は1960年頃から徐々に始まり、60年代後半から70年代にかけて加速していきました。最初、日本は海外資本が入ってくるのを選択的に抑えようとしていましたが、60年代後半から海外の圧力が強まり、資本自由化を受け入れ、日本経済の発展と共に日本企業も海外に出ていかざるを得なくなりました。60年代は、まだ大手企業の中で英語が必要なのは国際部門の人だけで、それ以外の人たちは、英語はできないけど自分たちが本流だという変な自負を持っていたくらいの時代でした。しかし、海外進出など徐々にグローバル化が進んでいくと、英語の必要性が認識され、企業は社員の海外留学などに力を入れ始めました。

私は、それまでの経歴で留学を含め海外との関わりが多く、また、当時の知り合いには、世界に積極的に出ているビジネスパーソンで活躍している人が多くいたため、常にグローバルなことに関心を持っていました。そして、これからの日本企業は、世界に出て、海外の企業と同じ条件の中で競争して、力をつけていくことが必要だと考えていました。さらに、世界に出ていくためにはまず英語が必要で、それを身につけることがわが国の発展につながると思いました。

— そのような時代を背景に1979年にTOEICテストがスタートしましたが、このテストが日本の国際化のために果たした役割をどのようにとらえていらっしゃいますか。

TOEICテストは、企業や学校、英語を勉強している人々に、英語のコミュニケーション能力を評価する基準を提供しました。そして、それが広く受け入れられて、現在では、日本の社会の中ですっかり定着しています。これは非常に素晴らしいことで、このことこそが、TOEICテストが日本の社会に価値を提供し続けてきた証だと思います。そして、大事なことは、この良い評価をこれからもずっと維持しつづけていくということです。

時代とともに、英語のコミュニケーションの形も変わっています。インターネットやSNSなど、その時代に即したコミュニケーションとは何かを常に考え、進化をしていってほしいと思います。

— 日本人は英語とどう向き合うべきでしょうか。

日本人は英語が苦手と言われますが、これはある意味当然です。日本語と英語の構造はまったく違いますし、子音や母音など発音も違います。しかし、苦手だからといって、英語を話さなくてもよいという時代ではありません。今、世界で何力国かの人が集まって話をする時、英語を使うのは当然です。だから、それなりに英語の教育の仕方でも考えていかなければならないと思います。

日本人は、とにかく英語を難しく考えがち

です。正しい英語を学ぼうと、前置詞やイディオムなど細部にこだわって、文法的に正しい英語を教えることに力を入れています。アメリカの大統領選を見ていると、トランプ氏の演説は中学程度の英語で成り立っているそうです。選挙では難しい言葉を使うよりも、わかりやすく伝えることが大切だからです。日本人も、まず、このレベルの英語を習得するのを目指すのが英語への近道だと思います。

伝えるには英語だけではなく、 マナー、内容、論理性も重要

— 国際コミュニケーションで大切なことは何ですか。

国際コミュニケーションで大切なのは、英語だけではありません。世界にはさまざまな文化があり、それらを理解して、その場にふさわしいやり方でふるまえるのが、国際コミュニケーション能力です。

たとえば会議の時、相手が話すのを待って話す、目上の人には反論しないなど、国によって暗黙のルールがあります。パネルディスカッションの時、日本人はあからさまに相手のことを批判することはしませんが、アメリカ人は、「あなたの言うことは違うと思う。なぜならば」と始めます。日本の中でそれをやったら、「いやな人」と思われますが、これはどちらが正しいということではありません。また、英語には敬語がなく、相手が目上の場合でも発言を遠慮する必要がありません。英語圏、特にアメリカではボスをファーストネームで呼ぶのが普通です。そういう意味では、私は英語で話す時の方が気楽です。でも、やはり日本人なので、多くの人の中に割って入って話すというのは少し苦手ですが、あちらに行けば、仕方ないので肝を据えてやっています。日本人、外国人という壁を作らないで、自分が置かれたシチュエーションに対応するということが大切です。

— 最近は発信力が大切だと言われていますが、国際社会で発信するために重要なことは何ですか。

私の経験では、海外で面会を求めるとき、「大使館の公使」などの肩書を示せば1回目は簡単に会ってくれます。しかし、2回目以降は相手にとって何か得るものがあったり、私に興味を持っていないければ会ってくれません。だから、相手の中で自分がどれくらいの価値を持っているかは、

2回目以降のアポイントの取りやすさで判断することができます。

経済雑誌の交遊録で、若い頃に出会って何十年も付き合いが続いているという話がありますが、これもビジネスに関係なく、お互い魅力を感じ合っているから続いているわけです。私も公使時代に知り合い、いまだにお付き合いが続いている海外の友人たちがいます。会った時は、政治のことや経済のこと、社会の動きなど、いろいろな話をします。その時の話は、単に情報を伝えるだけでなく、自分なりの意見や考え方を伝えたり、相手の話から新しい見方に気づくなど、お互いに面白さを感じているからこそ付き合いが続いているのだと思います。つまり、大事なのは話の内容なのです。そして、内容を伝えるためには、論理的に話す技術も必要になってきます。

私は国際的なパネルディスカッションに参加することが多く、そのような場では、相手の発言の専門的な語彙を理解し、自分もそれを使って発信し、しかも全員にわかるように論理的に話すということが求められます。学者の方は、みなそういう発信の仕方に慣れていますが、ビジネスパーソンもプレゼンや商談で同じことを身につけていましょう。これからは政治家も、英語で発信する能力を持つべきだと思います。

積極的に英語を使う環境に身を置くことが効果的

——先生はどのように英語を習得されたのでしょうか。

そういう私も、実は英語を習得するには苦勞をしています。高校2年の時、アメリカに留学しました。ホームステイをしていたホストファミリーの方に、動物園に連れて行っていただきました。虎の檻の前で、向かってきた虎に驚いて後ずさりした時、「Are you scared?」と笑われましたが、その意味がわかりませんでした。それまで英語は特別に得意ではなかったものの、少なくとも4年間は勉強していたわけです。日常生活でよく使われる簡単な単語ですが、それがわからないことにショックを受けました。

それからは、わからない言葉があった時は、その意味をまわりの人に聞いたり、新しい構造の文章を覚えたらずぐに使ってみるということを繰り返しました。8月に渡米してずっと英語が聞き取れませんでした。12月になったら突然聞こえ始めました。英語というのは段階的に上達するのではなく、ある段階で

突然上達する瞬間が来るものなのです。それからは英語に不自由を感じるものが減りました。

ただ、私の後悔は、それである程度できるようになったので、その後、大学受験の時も英語の勉強を特にせず、それ以降も英語の勉強をしなかったことです。そしてある時、自分に英語の語彙が不足していることに気づきました。経済雑誌の内容や仕事でもさまざまな英語の文書が来ますが、読んでいてわからない単語がいまだにいくつもあります。時間があるときは辞書を引きますが、今や覚えられません。もともと若い時、英語がある程度のレベルに行っても、勉強を継続すべきだったと反省しています。

——英語を身につける秘訣はありますか。

英語を身につけるために大切なことは、英語に触れる機会、話す機会を増やすことです。昔は英語を聞くのはFEN※くらいしかない時代もありましたが、今はインターネットでハーバード大学の有名な先生の講義を無料で聞くこともできます。

先日、海外のボーカルグループのコンサートに行きました。ステージから演者が満場の観客に、英語で「もう1曲歌って欲しいか」と投げると、会場のあちこちから「Yes! Yes!」と返ってきます。また、海外旅行に行くと、空港の入国審査では、「どこに泊まっているか」、「何日滞在するか」という質問に一人で対応しなければなりません。みなどうにかやっています。言葉は場数を踏むと、自然に身につけてきます。

日本にも外国人がたくさんいて、英語を話す機会が格段に増えています。私は、外国人観光客が地下鉄の駅などで地図を広げている時、近寄って「何かお手伝いすることはありますか」と声をかけるようにしています。これは私が外国に行っていた時に、そうしてもらって本当に助かったのが、そのお礼の気持ちもありますが、誰でも英語でコミュニケーションをとろうと思えばできるわけです。

今や、言葉を使うという環境に身を置こうと思えば、心がけ次第でできます。そのような積極的な気持ちが必要だと思います。

※FEN:終戦直後の進駐軍放送で、当初はWVTR、後にFEN (Far East Network)、現在はAFNに改称。

英語は世界に飛び出すためのファーストステップ

——英語を勉強しようという人たちにメッセージをお願いします。

私の人生を振り返ってみると、高校時代に

に留学したことで世界の扉が開き、その後の人生が変わりました。留学したそもその動機は好奇心です。当時、アメリカという国があるのはみんな知っていましたが、渡航制限や外貨持ち出し制限などの事情から一般の人は行くことができないと考えられていました。しかし、行けないと思うと、どうしても行って見たいと思う気持ちが募っていきました。そしてある時、高校の留学生のプログラムがあるということを知り、飛びつきました。そして幸運なことに渡米することができて、16歳という多感な時期に、とても得難い経験をさせてもらいました。その時に「外国」という壁がなくなり、その後は積極的に世界に飛び込んでいきました。

英語は世界に飛び出す手段だと思いません。勉強は大変だと思いますが、手段を得ることで、初めて世界で勝負ができるのです。そして、世界に出ることで、さらに自分自身の内容を充実させ、自分に磨きをかけることができると思います。そのためにみなさんもがんばってください。

——どうもありがとうございました。



川口 順子(かわぐち・よりこ)

明治大学国際総合研究所特任教授。東大、米エール大学院卒(経済学修士)。通商産業省入省後、世界銀行エコノミスト、在米大使館公使を務める。93年退官。企業役員を経て、2000～2004年にかけ、森内閣および小泉内閣において、環境大臣、外務大臣、内閣総理大臣補佐官(外務担当)を歴任。2005年より参議院議員を二期務め、2013年政界を引退。International Crisis Group(ICG)理事、Asia Society Policy Institute (ASPI)名誉フェロー、Asia Pacific Leadership Network (APLN)メンバーなど、外交・安全保障、環境政策を中心に国内外で活動している。

TOEIC® Speaking & Writing

団体特別受験制度 (以下、IP テスト) がモバイル実施でより簡単に。

TOEIC S&Wは、日常生活やグローバルビジネスに生きる“英語で話す・書く能力”を測定するテストです。TOEIC SpeakingとTOEIC Writingの2つのテストで構成されています。受験者はヘッドセットを装着し、PC画面の指示に従って音声を吹き込んだり、文章を入力したりして解答します。受験者の解答データは、北米在住で特別なトレーニングを受けて認定された採点者により、採点・評価されます。

受験方法には公開テストとIPテストがあります。公開テストは、年

24回、毎月1回(午前・午後)、13都道府県の会場で受験できます。

IPテストは企業、学校など団体単位で試験日と会場を任意で指定できます。実施方法は、機器の貸し出しによりご希望の会場で受験できる「IPテストモバイル実施」に加え、東京・名古屋・大阪にある「IBCテストセンター」での受験が可能です。

セット受験のほか、TOEIC Speaking のみの受験も可能で、IPテストではTOEIC Writing のみの受験も可能です。

「IP テスト モバイル実施」のご紹介

IBC から送付されたテスト専用 PC を電源につなぐだけで、簡単に試験が実施できます。テスト実施日、期間、時間を自由に設定できます。複数の拠点を持つ企業、教育機関でも、各会場にテスト専用 PC を送付しますので、社員や学生に平等に受験機会を提供できます。

1. 搬入

テスト実施日の前日までに専用のケースに梱包されたテスト資材が担当者宛てに宅配便で届きます。主な資材はテスト専用PC、ヘッドセット、マウス、実施マニュアルなどです。



2. セッティング

テスト会場に受験者の人数分の席を用意します。隣席の音声をマイクが拾うのを防止するため、PCは一定の間隔を空けて設置します。※ネット環境は不要です。



3. テスト実施

実施マニュアルに沿って、担当者が事前説明を行い、辞書、録音機器などの持ち込みがないかを確認します。

4. インストラクション

受験者は、PC画面の指示に沿って、受験者情報の入力を行います。また音声が入力できるか確認するため、マイクチェックが行われます。

5. スピーキングテスト

20分間、11問が出題されます。ヘッドセットを装着し、PC画面に出題される問題に、音声を吹き込んで解答します。短い英文を音読する、写真を見て内容を説明する、テーマについて自分の意見と理由を述べるなどが主なテスト内容です。



6. ライティングテスト

60分間、8問が出題されます。受験者は文章を入力して解答します。与えられた語を使い、写真の内容に合う文章を作成する、Eメールを読んで返信のメールを作成する、提示されたテーマについて、自分の意見や理由を記述するなどが主なテスト内容です。

7. 終了

返却する資材を確認してケースに戻します。後日、宅配業者が資材を回収します。テスト結果は、2週間前後でインターネットと郵送で提供され、担当者を通じて確認することができます。

英語学習のモチベーションをさらに高めるTOEIC S&W

2015年度(2015年4月から2016年3月)にTOEIC S&W IPテストの受験者を対象にアンケートを実施いたしました。「また、受験したいですか?」との質問には、企業では68.5%の方が、学校では58.1%の方が「とても受験したい」、または「やや受験したい」と回答しています。

「英語学習のモチベーションは上がりましたか?」との質問に対しては、企業では75.2%の方が、学校では68.6%の方が「とても上がった」と「やや上がった」と回答しました。

また、以下のような感想をいただきました。

●「このテストは自分の意見を持っていないと解けないため、とても勉強になったし、楽しかった。Skypeの英会話などで力をつけてまた受験したい」(大手印刷会社社員)

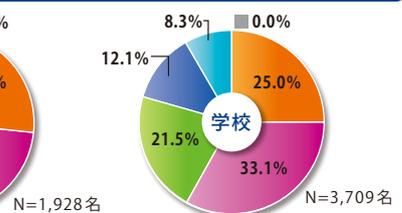
●「普段英語で話したり、書いたりする機会がほとんどないため、スピーキング、ライティングの力の無さを痛感した。これをモチベーションとして、今後の英語学習に活かしていきたい」(大手電機メーカー社員)

●「スピーキングをやってみて、自分がいかに伝えたいことを英語で話すことができないのわかりました。もっと1~2年生の頃にやっておけば、自分の力を知ることができてよかったと思う」(大学生)

●「難しかったけれど、慣れないSpeakingやWritingのテストはとても楽しかった。高1とかの頃からやっておけばよかった」(高校生)

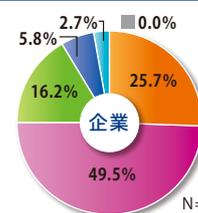
また、受験したいですか?

- とても受験したい
- やや受験したい
- どちらとも言えない
- あまり受験をしたくない
- 全く受験をしたくない
- 回答なし



英語学習のモチベーションは上がりましたか?

- とても上がった
- やや上がった
- どちらとも言えない
- あまり上がらなかった
- 全然上がらなかった
- 回答なし



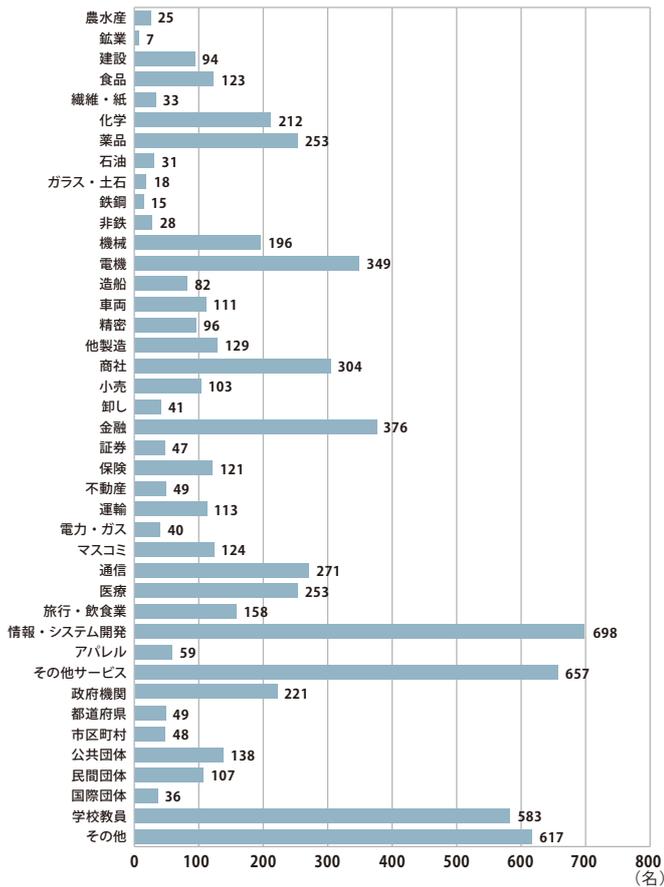


TOEIC® Speaking & Writing 公開テストアンケート結果

公開テスト、IPテストともに、年々受験者が増加しているTOEIC S&Wですが、これまでどのような方が受験されているのでしょうか。2015年度(2015年4月から2016年3月)の公開テストのアンケートからご紹介します。

さまざまな業種の方が受験

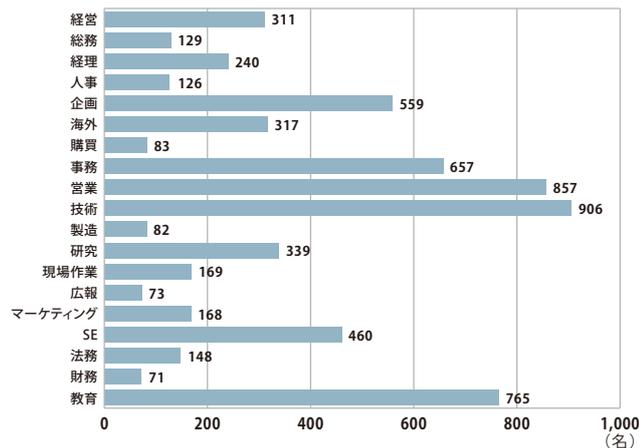
幅広い業種の企業・団体の方が受験していますが、最も多かったのは「情報・システム開発」の698名で、次が「学校教員」の583名、3位は「金融」376名、4位「電機」349名と続いています。



技術・営業を中心に幅広い職種

職種で一番多かったのは、「技術」で906名、そして「営業」が857名と、技術系、事務系の最前線の方が目立ちますが、3位には「教育」765名、4位は「事務」657名と、バックオフィスを支える方が続いています。

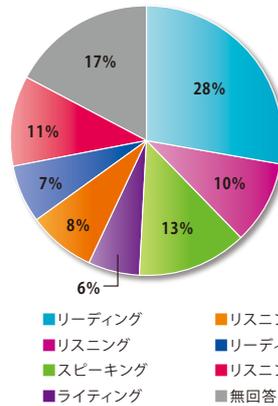
現在勤務されている場合、職種についてもっとも近いものを選択してください



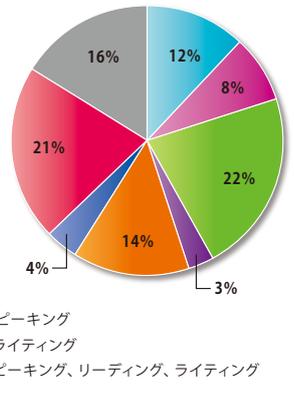
4技能の中でも「スピーキング」の大切さを認識

4つの言語スキルのうち、「最も使用するスキル」という質問に対しては、「リーディング」を選んだ人が28%と一番多く、次が「スピーキング」で13%でしたが、「最も重要視するスキル」としては、「スピーキング」が22%とトップ、「リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング」すべてと答えた人が21%、さらに「リスニングとスピーキング」と答えた人が14%と、3位までのすべてにスピーキングが含まれていました。国際社会で自ら発信する言語として「スピーキング(話す)」の重要性を多くの人が意識されているようです。

言語スキルのうち最も使用するスキルはどれですか？



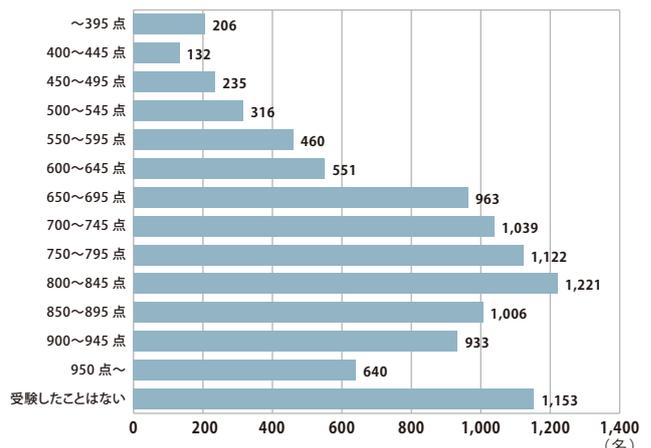
言語スキルのうち最も重要視されている(いた)のはどれですか？



650～945点を中心に広い層の受験者がチャレンジしています

TOEIC S&Wの受験者の約9割がTOEICテストの受験経験があり、スコアも幅広いことがうかがえます。中でも、650点以上の方が約7割を占めています。また、「TOEICテストを受験したことはない」と回答した方は1153名いました。TOEICテストの受験経験を問わず、TOEIC S&Wにチャレンジする受験者もいることがわかります。

最も最近に受験されたTOEICテスト(リスニング/リーディング)のスコアはどの範囲ですか？



英語発信力向上を応援する さまざまな活動を推進！

～発信することからコミュニケーションは始まる～

英語によるコミュニケーション能力を習得するためには、英語圏で生活するなど、常に英語を使う環境に身を置くことが重要と言われています。大切なのは、実際に英語を聞き、読み、話し、書く機会を増やすことですが、英語学習をする人の多くが、日ごろ英語でコミュニケーションを図る機会をあまり持てないのが現実です。

IIBC では、英語での発信力向上を応援するため、英語を使った話す場の提供を目指したさまざまな活動にも力を入れています。本年 2 月から 3 月に開催した内容をご紹介します。

2月23日(火)～29日(月)

J-WAVE 共催 TOEIC® ENGLISH CAFÉ SPEAK UP WEEK

～J-WAVEナビゲーターと一緒に英語の楽しさを体験する～

六本木ヒルズのヒルズカフェ /スペースに1週間の期間限定で、「英語を話す場」を提供する「TOEIC ENGLISH CAFÉ」をオープンしました。期間中は、カフェ来場者に TOEIC S&W の Writing のサンプル問題にチャレンジしてもらう企画を実施、多くの方々にご参加いただきました。

カフェの目玉は、J-WAVE とのタイアップで期間中毎日開催され



ナビゲーターのトークに耳を傾ける参加者

たトークイベント。事前にお申し込みいただいた方を対象にした参加型のイベントで、J-WAVE の人気のナビゲーターが日替わりで登場し、ナビゲーターと一緒に英語でコミュニケーション

する楽しさを体感していただきました。出演者はレイチェル・チャンさん、マッシューさん、秀島史香さん、金子奈緒さんなど、いずれも留学などの海外居住経験があり、ネイティブ同様に英語を操り、英語圏の生活習慣などにも詳しい方々です。ナビゲーターからは、毎回、旅や日本文化、留学、ビジネスなどのテーマに基づいて、ご自身の留学体験や英語習得術、ビジネスシーンの英会話

の基本などのお話や、英語でコミュニケーションすることの楽しさなどが語られ、参加者は熱心に耳を傾けていました。

その後、グループワークでは、与えられたテーマに対し、どのように英語でプレゼンテーションするかをテーブルごとに話し合いました。代表数名がそれぞれ壇上に設けられたラジオ局のスタジオに見立てたセットに上がり、ナビゲーターとして英語のトークや曲紹介にチャレンジするコーナーもありました。最後の曲紹介が決まり、音楽が流れると会場は大きな拍手に包まれました。

参加者からは、「初対面の人と勇気をもって英語で話すことで、一步踏み出すこ



六本木ヒルズに期間限定でオープンした TOEIC ENGLISH CAFÉ

とができた」、「英語に対して同じモチベーションを持っている人と接することで良い刺激になった」、「あつという間に時間が過ぎ、もっと話していたかった」などの感想をいただきました。



ステージでJ-WAVEの模擬放送に挑戦する参加者

3月11日(金)

日米協会共催 Let's Speak & Communicate!

～国際ビジネスパーソンのための
インタラクティブコミュニケーション～

3月11日には、東京港区のアメリカンクラブにて、一般社団法人日米協会(AJS)とIIBCの共催で、両団体の参加者が英語で交流するイベントが開催されました。日米協会は日本とアメリカ両国の相互理解と友好関係の促進を目的に設立された団体で、会員間では英語でのコミュニケーションが当たり前の環境です。そして、会場となったアメリカンクラブは、在日アメリカ人のために設立された伝統ある社交クラブです。グローバルなビジネスシーンでは、レセプションやパーティーなど、英語でコミュニケーションする機会がしばしばあります。今回のイベントは、日本の今後を担うビジネスパーソンの方々が世界で活躍していくために、少しフォーマルな場での英語でのコミュニケーションを体験していただくことを目指して企画しました。

イベントは軽食やドリンクが用意され、リラックスした雰囲気です。オープニングでは、タイム・ワーナー映画宣伝部長や2016東京オリンピック・パラリンピック招致委員会エグ



各テーブルでは、ネイティブモデレーターを中心ににぎやかな会話が行われていました



加治慶光氏のオープニングスピーチ

ゼクティブ・ディレクターなど豊富な国際経験をお持ちのアクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター加治慶光氏が、グローバルにコミュニケーションするた

めに大切なことについてスピーチされました。

そして、いよいよ参加者同士のスピーキングタイム。参加者は話すテーマを「Global Business」と「Different Culture」から選択し、テーマごとに5～6名のテーブルに分かれて着席。各テーブルには進行役として日米協会からモデレーター1名、さらにIIBCから英語での会話を円滑にするための進行サポートスタッフ1名が加わりました。

テーブルはもちろん全員が初対面ですが、着席と同時に英語での自己紹介や挨拶を交換し、スピーキングタイムが始まるころにはすでに打ち解けた雰囲気。みなさんテーマに沿って積極的に発言していました。そして、最後にテーブルごとに話し合った成果を発表しました。

参加者からは、「普段英語を話す機会が少ないことはもちろん、英語でビジネスについて考えることもないため、英語を使って考えるとても良い機会となりました」「普段英語を全く使っていないので、実際の英語コミュニケーションレベルがどの程度か知ることができた。参加者のレベルが高くて刺激を受けた」などの声が寄せられ、充実したイベントとなりました。



アンケートに感想などを書き込む参加者

3月24日(木)

TOEIC® Speaking & Writing ‘公式教材で始める’ 英語発信力向上ワークショップ

～「英語の流儀」を学び、伝える技術を磨く～

「会議で言いたいことを英語で思い通りに伝える」、「英文メールで複雑な内容を苦勞なく伝える」など、さまざまなビジネスシーンを想定して英語の勉強に励んでいる方も多いと思います。そのようなビジネスパーソンの方々に向けて、3月24日、東京・大手町のサンケイプラザにおいて、「TOEIC Speaking & Writing ‘公式教材



参加者には受付時に教材が配布されました



「英語の流儀」について説明される横川先生

で始める'英語発信力向上ワークショップ」と題したワークショップを開催しました。

今回のイベントは、東京海洋大学グローバル人材育成推進室特任准教授の

横川綾子氏を講師にお招きし、TOEIC S & Wの受験準備に最適な公式教材『TOEIC Speaking & Writing公式テストの解説と練習問題』を使いながら、テストに向けた学習法や教材活用法をワークショップ形式で学ぶという内容です。来場された参加者には、ワークショップ当日から学習を始めていただけるよう、本公式教材が無料で配布されました。

横川先生が講義の中で強調されたのは、論理的にわかりやすく使えるための「英語の流儀」でした。なかでも重要なのは、「英語の世界では、聞き手・読み手が理解できるかどうかは、すべて話し手・書き手に責任がある」ということです。さらに聞き手・読み手の負担を考慮しながら発信することの大切さと学習の方向性を指導されました。

講演後に設定した模擬授業のコーナーでは、登壇した2名のモデル学習者を相手に、教材の問題への取り組み方を指導されました。最後に、参加者全員が隣の席の人とペアになってTOEIC S & Wの設問を使ったタスクにチャレンジしました。実際に声に出したり、隣の席の人とコミュニケーションを取りながら、タスクを実践することで伝える技術を磨き合いました。



隣の参加者と2人1組で英語のコミュニケーションを実践

ISU 四大陸フィギュアスケート選手権 2016

～ 学生国際ボランティア ～

IIBCは、台湾のTOEIC実施機関であるCSL (ETS 台湾区代表忠欣股份有限公司) および韓国のTOEIC実施機関であるYBM Sisa.Comと共に、2月18日～ 21日、台湾の台北アリーナで開催された四大陸フィギュアスケート選手権 (Four Continents Figure Skating Championships) の学生国際ボランティア募集の国内周知と一次選考に協力しました。



台湾と韓国のボランティアと記念撮影

四大陸フィギュアスケート選手権は、ヨーロッパを除くアジア・アフリカ・アメリカ・オセアニアの四大陸から有力選手が出場する国際大会で、世界選手権に次ぐ重要な大会です。

今回は、日本で6名の学生ボランティアが派遣されました。応募要件は、笑顔と熱意があり、18歳以上の大学・短大生で、TOEICスコア750点以上かつ、TOEIC Speakingスコア140点以上であること。たくさんの応募の中から6名が選ばれ、2月16日から21日まで台湾に滞在し、チームに分かれて、Accreditation (関係者受付) やSite Control (会場整備)、Press (報道関係)、Ticketing (チケット受付) などの運営業務に当たりました。



会場で案内をする萩原愛子さん

選ばれた6人は、TOEICスコアはもちろん、TOEIC Speakingも高得点をマークしており、本ボランティアは、英語でコミュニケーションを図る格好の舞台となります。大会にはアメリカ、カナダ、中国、韓国、オーストラリア、

南アフリカなどから選手やスタッフが集まります。世界の選手やメディアとコミュニケーションをとるには、特にスピーキング能力が重要となります。

もうひとつ6人が楽しみにしていたのは、ボランティア活動を通じて、台湾や韓国のボランティアメンバーと交流すること。フリータイムに台北市内を一緒に観光したり、お互いの文化について語り合ったりしました。帰国時に空港では、別れを惜しんで涙ぐむ学生もいましたが、連絡先を交換して、帰国後も交流が続いています。

活動を終えたみなさんは、「国際的な舞台上で自分の英語力を試した



台湾の取材を受ける飯盛祐子さん

たことで大きな自信になったと同時に、できたこととできなかったことが見えてきて、これからさらに英語の勉強に取り組むモチベーションになりました」と語っていました。この経験をステップに、大きく世界に羽ばたいてほしいと思います。

詳細は、IIBCサイト内でも紹介しています。

<http://www.toeic.or.jp/iibc/volunteer/skate/index.html>

2016年2月10日(水)

『「地球人財」がグローバル時代を勝ち抜く』 出版記念フォーラムを開催

IIBCではTOEIC®事業をはじめ、グローバル人材育成を支援するGHRD (Global Human Resources Development) 事業にも力を入れています。その活動の一環として、2012年から主にグローバル人材育成に携わる方々や関心をお持ちの方々を対象に、年6回「地球人財創出会議」を開催しています。本会議は、ゲストスピーカーをお招きし、ファシリテーター、参加者を交えたインタラクティブ・セッションを通じ、グローバル人材を取り巻く課題について議論しています。

2015年12月、これまでの地球人財創出会議の内容をまとめた書籍『日本発、世界に飛躍「地球人財」がグローバル時代を勝ち抜く』が出版されました。この出版を記念して、2016年2月10日に東京、ベルサール半蔵門において、フォーラムを開催しました。

「VUCA時代のグローバルリーダー育成を考える ～『地球人財』がグローバル時代を勝ち抜く～」と題し、講演とパネルディスカッションを行いました。第1部では「グローバル時代に個人はどうあるべきか」をテーマに、IMD学長ドミニク・テュルバン氏による基調講演「VUCA時代のリーダーシップ」、「グローバルリーダーの条件」をテーマに、テュルバン氏とIMD北東アジア代表 高津尚志氏との対談、そして(株)CORESCO 代表取締役 古森剛氏による特別講演「地球人財の標準装備～フォロワーの視点から自分を見つめる～」を行いました。第2部では古森氏に加え、ユニリーバ・ジャパンHD(株)取締役人事総務本部長 島田由香氏、(株)日立総合経営研修所代表取締役 取締役社長 山口岳男氏をお招きし、「グローバル時代に地球人財をどう育成するか」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

会場には、企業・団体の人事担当者の方を中心に約300名の方が来場し、熱心に耳を傾けていました。



【書籍紹介】

『日本発、世界に飛躍「地球人財」がグローバル時代を勝ち抜く』

2012年から開催してきた地球人財創出会議の内容をまとめ、2015年12月に出版いたしました。書籍化に際し、地球人財創出会議ファシリテーターの高津尚志氏 (IMD 北東アジア代表) と古森剛氏 (株式会社 CORESCO 代表取締役) に巻頭対談を、竹中平蔵氏 (現・慶應義塾大学名誉教授) には巻末特別インタビューにそれぞれご登場いただきました。

多様性活用力、人の心をつかむ／人に影響を与えるコミュニケーション力、変化に対応するための Resilience、リーダーとしての自己開示など、グローバル化する世界でリーダーとして活躍するために必要な要素がさまざまな切り口から語られています。

グローバル人材育成に携わる方々や関心のある方々をはじめ、企業の人事ご担当者の方々、企業の経営に携わる方々、さらにご自身がグローバルに活躍したいと考えておられる方々などにも、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。



概要

【タイトル】『日本発、世界に飛躍「地球人財」がグローバル時代を勝ち抜く』

【編者】 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

【発行】 ダイヤモンド社

【体裁】 A5 / 208ページ

【目次】

巻頭対談 出でよ!育てよ!日本発グローバルリーダー

第1章 「地球人財」とは何か?

第2章 価値観を伝えよ!—コミュニケーション力

第3章 “地球的”であれ!—リーダーシップ力・イノベーション力

第4章 真のグローバル化に必要な学習とは?

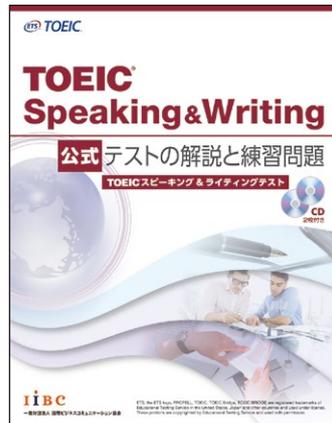
巻末特別インタビュー 日本の課題としての英語とイノベーション

【価格】 1,500円+税

テストの準備をしながら、
伝わる英語力が身につく

『TOEIC® Speaking & Writing 公式 テストの解説と練習問題』

本書は、TOEIC Speaking & Writingの公式教材としては5年ぶりとなります。本番と同様のクオリティーで作成された練習問題に加え、バラエティに富んだ解答例や表現例を掲載しており、テストへの理解を深め、テストの受験準備にご活用いただけます。また、学習を通じて実践的なコミュニケーション英語能力の向上にもお役に立ていただけます。



【本書の特長】

■ 合計でテスト5回分の問題と解答例を掲載

米国ETSが作成した問題を合計で5回分※掲載。本番と同じ難易度・形式で学習できます。

■ 解答までのプロセスを説明

問題形式ごとに解答作成の考え方やポイントを詳しく説明しています。

■ 高い評価を得る解答例をもとにした詳しい説明

すべての問題にETSが作成した最も高い採点スケールに相当する解答例を掲載しています。

■ 実践的な英語力を養う学習方法を紹介

解答例や表現例を使った学習方法を紹介し、実践的なコミュニケーション英語能力の向上に役立ちます。

※テスト形式3回分と問題形式ごとのテスト2回分の設問をあわせて合計5回分の問題と解答例を掲載

概要

【タイトル】『TOEIC® Speaking & Writing 公式 テストの解説と練習問題』

【発行】 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

【体裁】 A4変形判 304ページ/オーディオCD2枚付き

【定価】 本体2,800円+税

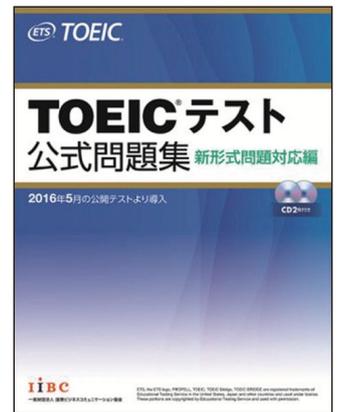
【発行日】 2015年12月16日

2016年5月のTOEIC公開テストから
一部変更される出題形式に対応

『TOEIC® テスト公式問題集 新形式問題対応編』

2016年5月29日のTOEIC公開テストからのテストの出題形式の一部変更に伴い、『TOEICテスト公式問題集 新形式問題対応編』を2016年2月18日に発売しました。

本書では、TOEICテストの制作元であるETSが、実際のTOEICテストと同じプロセスで制作した、新形式問題に対応する練習テストを2回分収録するとともに、新たに導入される新形式問題の内容理解に役立つサンプル問題や、Q&Aを掲載しています。また、音声も本番同様のクオリティーで、TOEIC公式ナレーターが担当しています。新形式問題の理解やTOEICテストの受験準備にご活用いただけます。



【本書の特長】

■ 2016年5月以降の新形式問題に対応、本番と同様のクオリティー

- ・ETSが、実際のTOEICテストと同じプロセスで制作した2回分の練習テストを収録。
- ・2016年5月29日のTOEIC公開テストより一部変更される新しい出題形式の内容を反映。

※団体特別受験制度（IPテスト）における出題形式の一部変更は2017年4月に導入を予定しています。

- ・変更される出題形式の内容理解に役立つサンプル問題とQ&Aも収録しています。
- ・音声は本番同様のクオリティーで、TOEIC公式ナレーターが担当しています。

■ 「参考スコア範囲換算表」を使っておよそのレベルが確認できます

■ 各PartのDirectionsとその訳を掲載しています

■ Part 3、Part 4の解説がより充実

- ・「国旗アイコン」：どの国（米国・英国・カナダ・オーストラリア）の発音なのかを視覚で判別できます。
- ・「CDトラックをさらに細分化」：会話と設問で分けられているため、会話だけを聞き、繰り返し学習することができます。
- ・「色による識別」：解答の根拠となる箇所や解説内容を色付けしています。

概要

【タイトル】『TOEIC® テスト公式問題集 新形式問題対応編』

【発行】 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

【体裁】 A4変形判 本誌120ページ / 別冊『解答・解説』176ページ
オーディオCD 2枚付き

【定価】 本体2,800円+税

【発行日】 2016年2月18日

IIBC 世界は、あなたでつながる。

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication
TOEIC®公式サイト <http://www.toeic.or.jp>

【お問い合わせ】

東京 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-5521-5901
名古屋事業所 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル Tel. 052-220-0282
大阪事業所 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル Tel. 06-6258-0222
【報道関係お問い合わせ】
広報室 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-3581-4761